



学校事例 4

東海北陸 地区

愛知県
名古屋市立東桜小学校

全員が同じ土俵で行う 授業研究を核に、子どもも 教師も学び続ける集団に

どんな大人になってほしいか



- 自分の根っこ（得意なこと、郷土愛）を持てる人
- 自分の頭で考えて自分の意見を言える人
- 相手の意見を取り入れて、柔軟に変化することが出来る人
- みんなと共同作業が出来る人

そのための小学校の役割



- 一人ひとりの子どもの良さを見つけて伝えること
- 生涯にわたって「学び続けたい」と思える意欲を育むこと
- 子ども同士が学び合える話し合い活動が出来る指導法をつくり上げること
- 学習習慣や生活習慣をはじめ、小学生の間に身に付けさせたい基礎的な力を付けること

未来に残したい 東桜小学校の力強さ

- ◎ 子どもの学ぶ意欲を育むこと、学び合う楽しさを伝えることを学校の役割と捉え、そのための授業づくりに、教師全員で一丸となって取り組んでいる
- ◎ 授業だけでなく教育目標づくりなどでも、全ての教師が同じ土俵で話し合い、考えることで、集団の質を高め、教師自身も学び続ける集団になることを目指している



名古屋市立東桜小学校
教務主任。 「自分の生活する地域で、周囲の人と上手にかかわり、仲良く協力して過ごせる子どもを育てたい」

山本伸吾
Yamamoto Shingo



名古屋市立東桜小学校教頭
「自分の良さを見つけ、向上心を持って少しでも高めようとする子どもを育てたい」

土屋眞治
Tsuchiya Shinji



名古屋市立東桜小学校校長
「昨日より一歩前進している自分でありたい。校長として一日一日、子どもが前進できる学校をつくりたい」

坂野重法
Banno Shigenori

School Data

設立 1872(明治5)年

校長 坂野重法先生

児童数 261人

学級数 10学級

所在地 〒461-0005

愛知県名古屋市東区東桜1-13-1

TEL 052-961-7877

URL <http://www.higashisakura-e.nagoya-c.ed.jp/>

公開研究会 未定



学び合う楽しさを伝え 学ぶ意欲を育みたい

名古屋市立東桜ひがしざくら小学校は名古屋市の中心部に位置している。自然や虫に興味を持ち、心優しい、落ち着いた子どもが多く、家庭や地域は、学校に対してとても協力的だという。子どもについて、坂野重法校長は次のように話す。

「どの子どもも礼儀正しく素直で、家庭で大事に育てられているのを感じます。基本的な学習習慣や生活習慣が身に付いている子どもが多いため、授業づくりに多くの力を注ぎやすいのは、本校の強みです」

子ども同士の仲も良く、校内は温かい雰囲気にも含まれている。その反面、多様な人間関係の中でもまれる経験が少なく、自分の意見を積極的に出すたくましさに欠けることが課題だという。

同校の校内研究のテーマは、「意欲的に学び続ける子をめざして〜学び合える話し合い活動を通して〜」だ。授業での学び合いを通して、学ぶ意欲を育む研究に取り組む。研究テーマの背景にある思いを坂野校長はこう語る。

「以前に比べ、子どもが学習に意義を見だしにくい時代になってきていると思います。社会が変化し、良い大学や会社に入るために学習するという前提が崩れ、『どうして勉強しなければならぬの?』という子どもの疑問に答えにくくなっています。そんな状況下で、私たち教師

は、今まで以上に子どもに学ぶことの楽しさを教え、『勉強そのものが楽しい』『自分が成長するのがうれしい』と実感させて、もっと学びたいと思う意欲を引き出す必要があると考えています」

同校の授業を見ると、挙手をして発言したがる子どもが多く、十分に意欲を持っているように見える。しかし、土屋眞治教頭は、人の意見を聞いて自分の意見を深め、発展させたいという気持ちを抱くようになることが、本当の意味での意欲だという。

「発言が多いのは良いことですが、『友だちより早く言いたい』『自分の考えをたくさん言いたい』という気持ちからの発言は、ひとりよがり
で本校の目指す意欲とは言えません。友だちの考えをよく聞いて、自分の考えを変容させていくことの価値を理解し、友だちと学び合いたいという思いを持ってもらいたい。これが学校で勉強する意味だと思えますし、私たちの考え『意欲』です」

教務主任の山本伸吾先生も次のように話す。

「意欲は、教師が教えて育つものではありません。子どもが自分で学びたいと思えるようにどのように導くのか。教師が言わなくても興味を持ったことを調べる、自分だけでなくみんなにも教えたいと思う、友だちの考えを取り入れようと思う。そうなった時が、意欲が高まった時だと思えます。このように感じる授業をつくりたいと思っています」

授業中の発言記録と検討会で 共同で授業をつくり上げる

学習意欲を高める授業づくりの研究は、2009年度から続けている。10年度までは、まず学習意欲とは何かを考えることから始め、学習意欲の土台として、基礎・基本となる学習習慣をしっかり身に付ける指導に取り組んだ。更に、話型やハンドサインを用いるなどして、子どもが自分の考えを上手に表現すること、そして、友だちの考えに対して賛成・反対・付け足しなどを表明する力を育てることに注力してきた。11年度は、学び合いによる考えの変容など、一人ひとりの考えがより深まることを目指している。

「教師の発問」は重要な研究テーマの一つだ。発問は、答えが一つではない「オープンクエスチョン」にすることを心掛けている。例えば、「アメリカ大陸を発見したのは誰か」という質問は、答えが一つしかない「クローズドクエスチョン」であり、知っている子どもしか答えられない。そこで、「どうしてアメリカ大陸を発見したいと思ったのか」など、オープンクエスチョンにして多様な考えが出やすいようにする。また、子どもの考えをつなぐ問い返しの仕方や板書の仕方も工夫する。

このような授業をつくるために、同校が大切にしているのは授業研究だ。教師全員がそれぞれ年間1回以上公開授業を行い、事前・事後検

討会も低・中・高学年の部会に分かれて、その都度開く。他に年2回の全体公開授業も実施している。

事前検討会では、指導案の作成だけでなく、教師が子ども役になる模擬授業を必ず行う。山本先生は、そのねらいを次のように説明する。

「指導案は頭の中で描いたものなので、実際に授業をしてみると予想外のことが起こります。模擬授業を行うことによって、発問が分かりにくかったり、子どもから想定していかない反応があったり、授業の展開がスムーズではなかったりすることに自ら気付く、授業前に修正できるので」

授業の「リハーサル」を行うことは、授業者だけでなく、子ども役として参加した教師にとっても大きな意味がある。授業の流れや発問の内容を事前に把握しておけるので、授業では子どもの様子をより見取ることが出来、事後検討会での議論が深まるからだ。授業者と他の教師が共同で授業をつくり上げていく意識が持て、教師集団としての一体感も強まる。

公開授業では、教師の発問や子どもの発言の全てを、担当者がパソコンで記録する。授業後にすぐに印刷して、事後検討会の議論の材料とするためだ。

「事後検討会は、『授業はこうあるべき』などの抽象的な議論になることがあります。詳細な授業記録があると、事実を即した話し合いが

出来、解決策も具体的にになります」(坂野校長)

**皆が同じ土俵で
一生懸命に授業をする**

坂野校長が全ての公開授業を参観し、講評を書いて教師全員に配るのも特徴だ。授業が終わるとすぐに気付いたことなどを書き始め、A4版4〜5枚の量に講評をまとめて、基本的に当日、配布する(図)。

「先生方の授業を見せてもらい、勉強させてもらうことへのお礼を込めて、コメントをしています。授業者に対して個別にアドバイスもしますが、講評を先生方全員に配布するのは、例えば『この部分を見習ってほしい』といったことを他の先生に伝えたいからです。私も先日、模擬授業をしましたが大切だと思っただけ、若手教師もベテラン教師も、皆が同じ土俵の上で一生懸命に授業をすることです。ベテラン教師が一生懸命、教材研究をする姿を見て、若手教師

図 坂野校長による公開授業の講評(一部抜粋)

の考えに朱で加線・修正させる作業をさせて、最終的な考えをもたせることにする。このように、個人の考えが寛容したとき、学習意欲が高まったと考える。

③ 学び合える話し合いの子どもの発言分析
学び合える話し合いは、多様な考えを出させることが必要である。そこで、一つの発問で、子どもの発言がいくつかつながっていかを数量的に測ることにする。数多くつながった方が多様な考えを出させ、学び合える話し合いであると考える。
具体的には、友達の意見を聞いたら、それを受けて、「賛成」「反対」「付け足し」「質問」などの「つなぎの言葉」をつかっけて発言をつなげていく。また、話し合いがながるよう、意見だけでなく、その根拠を言わせるようにするとよい。同じ考えでも、根拠が違うこともある。根拠を言わせることにより、相手にも考えが伝わるし、話し合いも深まる。
それに加え、それぞれの多様な考えが並列して出ただけでなく、分類したりまとめたりして質的に高まっていく話し合いをさせる。そこで、次のような発言ができるように指導していきたい。
○ 友達の発言をグループ分けして整理する。
○ 友達の発言と発言をまとめる。

⑤ 学び合える話し合いにするための教師の発問
多様な考えが出るようなオープンクエスチョンにする。正しい解答はない。子どもの発言をつなげるには、一人の子どもの考えを他の子どもの1対1の受け答えにならないようにする。また、発言をよく聞かせたい。子どもの発言を促すためにも、教師が「発言の整理」「発言の発問」を要する。

2 授業分析
① 教師の発問・指示
A—思考の要求 B—ゆさぶり・視点の転換 C—掘り下げ・焦点
② 児童の発言
①—新たな考え ②—賛成意見 ③—付け足し意見 ④—反対意見

教師の発問と児童の発言	発言の種類	学び合い
T 今日、3の場面の後半を中心にみんなで話し合います。3の場面の後半のねらいを言います。「大造じいさんはなぜ残雪をうたなかつたのでしょうか。」みなさんの課題はホワイトボードに書いてあります。1番多か	A	

授業については教師の発問と子どもの発言を並べ、詳細な分析やアドバイスが書かれている

った課題はこれです。今日は大造じいさんの考えをみんなでも考えよう。 T 1年目はどういう作戦を立てた?どんな気持ち? ゆづた:うなぎつり・・・1の場面だ。	A	○ ここでは、大造じいさんの気持ちを聞いている。 ● どんな気持ちで、どんな作戦を立てたのか、答えていない。十分理解していない子どもがいたら、もう一度、発問を繰り返すとか、発言の意図を尋ねるなど、ゆづた君の発言を声かしたい
ざら:大造じいさんが残雪をとらえたい。 一人で線を引いたり、付せんに書いていたりするー 線を引けたと思います。これから本領発揮です。今日の課題にしていることを探しましょう。大造じいさんの気持ちや残雪の行動など関係しているかも。残雪の気持ちを読み取れるところがあるかもよ。今までなかったよね。 できてる子は1、2の場面を思い出してくるべてみよう。それでは、話し合いをしながら浮かんできた言葉を書いてもいいです。	A	○ 「残雪をとらえたい」は、気持ちか考えか。 ○ 一人一人の子どもを教材に向かわせる時間は確保することが大事。 ○ 座席表などを活用し、一人一人の子どもがどんな考えをもっているか、チェックしておくとう良い。 ○ すでに学習した内容から考えを引き出そうとしている。
T 話し合いをします。なぜ大造じいさんは残雪をうたなかつたか。 あさら:僕は上の21行目のふたたびじゅうをおろしてしまいました。大造はなぜじゅうをおろしたかというと、23〜24から、残雪の目には人間も・・・なかつたところから、大造じいさんは残雪は・・・ 利:あさら君につけたし、残雪は人間もはやぶさもないからじゅうをおろした。	A	○ 主発問の繰り返し。 ○ あさら君は、残雪を撃たなかつた場面を線をおろしたときと比べて。通常の考え方である。 ○ 23〜24の文を根拠に説明している。
けん:25行目から残雪は仲間へ手を出すな。と思っっている。 てや:下の18〜19から、残雪はずこいなと思っただと思います。	A	● 「残雪は人間もはやぶさもないから」という根拠で意見をつけた。これが、撃たなかつた根拠になるだろうか。違い質問が必要。 ● 残雪がはやぶさに取った行動である。残雪の気持ちである。大造じいさんの考えとは違う。 ○ てや君は、残雪を撃たなかつた場面を最後の場面と考えた。そして、「強く心を打たれてたの鳥に対してのような気がしなかつた」ことを理由にあげている。

「学び合い」についての考え方や授業づくりのポイントと、本時の授業についてのコメントが記される

*同校の資料をそのまま掲載。子どもの名前は仮名

も頑張ろうと思うでしょう。教師の技も伝承されていくと思うのです」(坂野校長)

「坂野校長のコメントは皆が楽しみにしており、配られるとすぐに読み始めます。自分の授業を振り返る、また他の先生方が学ぶ貴重な機会となっております」(土屋教頭)

時には厳しいコメントも含まれるが、それは教師の指導力を高めるために不可欠だと考える。地域的に保護者が教育熱心であり、学校への期待が非常に高いこともあり、全ての教師が一定水準以上の授業を出来るように育て、教師や学校を守っていききたいという思いも強いという。

坂野校長の姿勢に見られるように、同校では教師が話し合い、共同で授業や学校経営を考える方針を大切にしている。例えば、学校教育目標は、中・長期ビジョンに照らし合わせ、各部署が単年度の具体的な目標をつくり上げる。

「子どもと日々接している教師が検討するからこそ、具体的な目標を設定できます。更に、自分たちで決めた目標だから達成しようという強い気持ちが生まれます」(山本先生)

坂野校長はこのように話す。「校長一人が力んで全てをトップダウンにしても、先生方はその気にならず、目標は『絵に描いた餅』になってしまいます。共同作業は集団の質を高め、人間関係を良くすることにもつながります」

年度末には、学校関係者評価の際に、各部署

の部長が保護者や地域住民に対して、目標に対する成果や課題をプレゼンテーションする。

「学校関係者評価の関係者には、課題は指摘してもらいますが、良い取り組みや成果に対しては、『出来るだけ、先生を褒めてほしい』と話しています。子どもと同じく、教師も学び続けなければなりません。その上で、外部から良い評価をいただくことは、とても大きなやる気の源になります」(坂野校長)



10年先、20年先を見据えた時、研究テーマである「意欲的に学び続けること」はますます重要になると、同校は考える。その学び続ける姿勢を育てるには自己肯定感を高めることも

重要なことだと、土屋教頭は言う。

「得意なことを自覚できると、自信を持って自分を高めることが出来、それが成長につながると思えます。ですから、一人ひとりの子どもの良さを見つけて、伝えるようにしています」

また、山本先生は、自分を認められた次の段階として、人と互いにかかわり合うことが大切だと言う。

「郷土に愛着を持ち、その上で世界の人たちと仲良くしていける子どもになってほしいと思

います」

二人の先生の話を踏まえて、坂野校長は次のように話す。

「価値観はますます多様化し、今後どのような社会になるのか分かりません。だからこそ、得意なことや郷土愛という自分の根っこを持つことは、とても大切だと考えます。そして、『自分の頭で考えて自分の意見を言う』『相手の意見を取り入れて柔軟に変わっていく』『みんなと一緒に共同作業をする』という三つのことが出来れば、充実した生き方をしていけるでしょう。小学生の時に身に付けるべき学習習慣や生活習慣を土台とした上で、生涯にわたって意欲を持ち、学び続ける人間になってほしいと思います」

学び続ける姿勢に関しては、教師も同じだ。学び合いを意識することで、子どもの見方、授業の組み立て方、授業研究の仕方などが変わってきた。更に、教師同士が協力し合うことで、授業の質を少しでも高めていこうと努力している。

「一人で教壇に立つ教師は、孤独な気持ちになりがちです。だからこそ、教師の全員参加による校内研究や学校づくりを心掛け、坂野校長を中心に皆で一つになって進んでいきたいと思っています」(土屋教頭)

東桜小学校は、将来に向けて、子どもも、教師自身も、学び続ける集団であることを目指している。